

# 中国語の音節末の /n/ の発音

—— 特に母音が後続する場合 ——

沼 野 治 郎

## はじめに

英語を母国語とする人に日本語を教えるに当たって、発音の面で気をつけなければならない点が幾つかあるが、その中に音節末の /n/ と後続する母音を連音させないように指導することがある。たとえば「田園」という語を [dennen], 「本を」という名詞+助詞の場合でも [honno] と発音する傾向が彼らにあるからである。日本語でも「観音」や「反応」, 「輪回」のような例があるが、われわれは「田園」[den en] や「親愛 [jin ai] なる」を連音させないで読むことに苦労しないし、それが普通の発音である。中国語においても、天安門を発音する時に、tiān ān mén と言ひ、tiān nān mén と言うことはない。

人がある言語を第二言語あるいは外国語として学ぶ時、初めに音韻の指導を受け、練習し、修得に励むことになる。その間「標準的な発音の原理を知って、忠実に注意深く練習して、発音を掌握する」<sup>1)</sup>に到ればよいのであるが、筆者の経験では音節末の /n/ の発音に関する限り、中国語では英語に比べてうまくいかなかったようである。中国語で /n/ の音に出会う毎に必ず舌先を歯茎につけて発音するのが、前後の音の環境によっては自分で不自然に感じられ出したのである。

羅常培と王均が言うように、日常の言語活動である音を単独で発音することはなく、必ず連続して発話する。1つの音は他の音と連なって、互いに影

---

注1) 羅常培, 王均, 『普通語音学綱要』, 商務印書館, 1981年, 北京, p. 4.

響し合うことを免れない。それで発音に変化が生じる<sup>2)</sup>。このような連音変化を、徐世榮は速く話す時に生じる自然現象と呼び、したがって学んで身につける必要はない、という<sup>3)</sup>。しかし上記の「標準的な発音の原理」の知識をもって練習しても、中国語を母国語とする人のように、自然にこの発音の変化を修得するのはむずかしい。そこでこの稿では、中国語の音節末の /n/ の発音について日英両国語と比較しながら、この間隙を埋めるよう試みる。

### 英語の /n/

英語の /n/ は舌先を上歯茎につけて呼気を閉鎖し、口蓋帆を下げて鼻から呼気を流出させて発音する。これは net, ten, tenant 等語頭、語末、語の途中のどの位置にあっても同じ方法で発音される。中国語のように一つ一つの音節に声調がかぶさって、各音節を認知しやすい声調言語 (tone language) と違って、音調言語 (intonation language) である英語では、音声の高低の度合いを変化させて感情や態度を表現する。そして語句の境界は移動性がある<sup>4)</sup>。それで、英語の /n/ の調音は、in America [in<sup>h</sup>əméri:kə], in an hour [in<sup>h</sup>ən<sup>h</sup>ɑ:ə] のような連音現象を生じる<sup>5)</sup>。

### 日本語の /n/

日本語の /n/ は厳密にはいわゆる撥音と呼ばれる日本語に特有の音<sup>6)</sup>の 1

2) 同上書, p. 151.

3) 徐世榮, 『普通話語音知識』, 文字改革出版社, 1980年, 北京, p. 160.

4) ロバート・ラド, 上田明子訳『文化と言語学』(英語教育シリーズ18), p. 54.

5) そのため a name と an aim が両方とも [əneim] と発音されることになる。両者は区別するために次のような open juncture と呼ばれる接続のしかたで発音される。すなわち /ə+néym/ と /ən+éym/ であって, +の記号は短い休止(あるいは潜在的休止)やときには声門閉鎖を表わす。

6) 国際音声学協会は 'Japanese syllabic nasal' (撥音のこと) を特別な記号 [ŋ] で表わしている。International Phonetic Association, "The Principles of the (次頁脚注へ続く)

つである。撥音は促音と共に parole 的性質を持ち、それだけを切り離して発音することは殆どないため、他の音節に比べて個人差があり動揺が激しく研究者の間でも一致しない<sup>7)</sup>。撥音には [n] を含めた閉鎖のもとと鼻母音の2種類がある。これを筆者の言語における撥音の観察を加えて、後続の音によってどのように現われるかを分類すると次の表1のようになる。

表1 後続音によって分類した撥音の異音(allophones)

撥音の音素 /N/ →	{	1. [Ṽ]/_ [ 母音 狭窄音 [s, ʃ, j, w] ハ行音 ]	例 1 禁 煙 [ki'ien] 建 設 [ke'wsetsu] 天 職 [te'i'joku] 本 屋 [ho'i'ja] 緩 和 [ka'u'wa] 人 件 費 [dʒiŋke'i'hi]
		2. { [m]/_ [p, b, m] [n]/_ [t, d, n, r, z, tʰ] [ŋ]/_ [k, ʝ, g]	2 散 步 [sampo] 本 箱 [hombako] 安 眠 [ammin]  テ ント [tento] 本 棚 [hondana] 三 男 [sannan] 叛 乱 [hanran] 三 千 [sanzen] 三 対 [santsui]
		3. [N]/_#	天 氣 [teŋki] 三 月 { [sappatsu] [saggatsu] 3 もちろん [mot'firoN] 本 [hoN]

註 1. 鼻母音, 2. 閉鎖 [m, n, ŋ], 3. 氣息集團の終尾にくる [N], の比率を1985年3月18日付朝日新聞の社説を例にとって調べると、撥音総数の内 1. →39%, 2. →57%, 3. →4%であった。

International Phonetic Association." International Phonetic Association, 1974, London, p. 44.

7) 池田敦音韻論的語について, 京都大学音声科学総合部会『音声科学研究 I』1961年, p. 48. (尾崎雄二郎『中国語音韻史の研究』東洋学叢書, 創文社, 1980年, p. 324の引用より。)

ここで調音の点から撥音を少し詳しく取り上げて見ると次のようになる。まず撥音全般について、有坂秀世は発音するときの要件を3つあげている。(1)まず声帯の振動を伴う息が必要である。(2)軟口蓋の垂下によって息を鼻腔へ通じなければならない。(3)口腔から漏れる息は余り多量でない方がよい<sup>8)</sup>。次に鼻母音は口蓋垂を下げ、喉頭から出る声を伴った呼気の一部を鼻腔を通過させて発音する母音である。閉鎖の [N] [m] [n] について服部四郎は、「英語の pang, under, amber における ng, n, m と異なる点の1つとして、国語の撥音の場合には、その on-glide が相当長く [N] [n] [m] それ自体は比較的短い」そして「舌や唇が極めて弛緩しており、その接触の力も亦甚だ軽微である」<sup>9)</sup>と観察する。最後に、語の末尾にある [N] は、口を狭めつつ、舌を少し後方へ引いて、舌根と垂下している軟口蓋を閉じて、声を鼻腔に送る口蓋垂鼻音である。したがって、調音点は口腔のずっと奥の方、軟口蓋の後部つまり口蓋垂下の近くにある。われわれは無意識に自然にこの調音を行っているが、アメリカ人には [ŋ] の音に聞こえ、フランス人には [ã] [ɔ̃] のような鼻母音に聞こえている<sup>10)</sup>。このように日本語の [n] は音素 /N/ (撥音) のほんの1つの条件変異音 (conditional variant) にすぎない。そして撥音に母音が続く時 [nV̆] と連音することはない。

### 中国語の /n/

中国語の /n/ は、舌尖と歯茎で呼気をさえぎり、呼気が鼻に抜ける鼻音で、舌尖中音の1つに数えられ、声母 (中国語の音節の初め) にも韻尾 (同終り) にも立ち得る。日本で出版された教科書でも中国で発行された教科書

8) 有坂秀世『音韻論』三省堂、1940年、東京、p. 82。

9) 服部四郎『『ン』に就いて』、「音声の研究」第三輯、1930年。有坂秀世『音韻論』三省堂、1959年、増補版、東京、pp. 84~85の引用より。有坂秀世も p. 85で、この見方に賛意を示しているが、尾崎氏は反対に緊張し、接触は強いと言う。(尾崎雄二郎、前掲書、p. 333) 筆者は前二者と同じ観察である。

10) 小泉保『日本語の正書法』大修館書店、1978年、東京、p. 65。

でも大体説明はそこまでで、英語の[n]に同じと書いたものもある。-nと-ngを区別して発音するように注意する以外は、後続の音によって音韻変化することに触れた本は少ない。中国で発行された中国語の音韻について書かれた書物でも、「音変」の項で儿化と文末の啊の変化について取り上げてはいても、韻尾の-nの音韻変化については、僅かに徐世栄が「普通話語音知識」、羅常培、王均が「普通語音学綱要」の中で、「関門」guān mén → guām mén, 「面包」miàn bāo → miām bāo, 「分配」fēn pèi → fēm pèi, 「三個」sānge → sāngge, 「分開」fēnkai → fēngkai, 「含糊」hánhu → hānghu等のm, b, p, g, k, hが続く場合の後退的同化をあげている程度である<sup>11)</sup>。それで、中国語の一学習者としての筆者は、個々の音をていねいに調音して練習してきたのだが、冒頭に記したように、nの音をどんな環境でも忠実に発音することに不自然さを覚え始め、「天安門」という語は連音しないというしるしとして、tiān'ān mén というように隔音符号'がついているが、この語の場合舌先は歯茎についていないのではないかと思いだめたのであった。

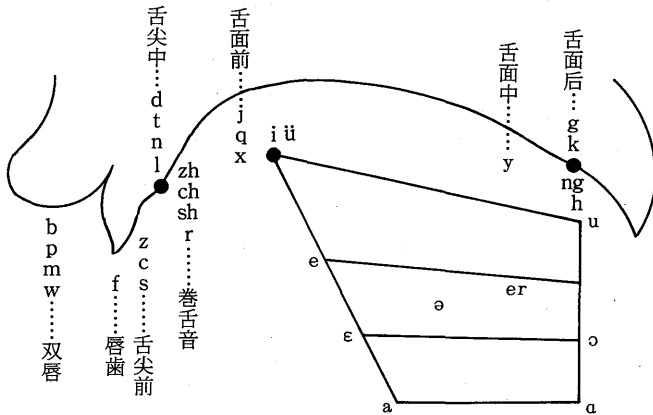
連音しないことについて、すなわち上記の隔音符号のように読む時、どのように発音しているかという点について、1つは中国人が母音で始まる音節を発音する直前に入れる舌根摩擦音[ʀ], 喉頭閉鎖音[ʔ], 時には[ŋ]<sup>12)</sup>に答えを求めることができる。しかし、筆者は、人が言語を普通の速さで話す時、互いに隣り合う音が影響し合い、自然な流れに結合していく過程で、発音の容易化の傾向<sup>13)</sup>によって連音が避けられているのではないか、つまり舌先が歯茎につかないで発音されているのではないか<sup>14)</sup>、と予測した。

11) 徐世栄『普通話語音知識』文字改革出版社、北京、1980年、pp. 159~160。羅常培、王均『普通語音学綱要』商務印書館、北京、1981年、pp. 154~155。

12) 趙元任, "The Voiced Velar fricatives as an Initial in Mandarin", *Maitre Phonétique*, ser. 89, 1948. (尾崎, 前掲論文 p. 341の引用より)。羅常培, 王均, 前掲書, p. 118。

13) 有坂秀世, 前掲書, 第4編, pp. 221~319。

14) C. F. Hockett, "Peiping Phonology" で Hockett は、/n/ がときとして、「舌尖が歯茎に向かう運動であって、閉鎖が complete しない」ことがある、と言っている。(大河内康憲, 「広母音イニシャルに先行する鼻音ファイナルについて」大阪市立大学文学部中国学研究室刊, 「中研ノート」No. 10, 1966年11月, p. 25の引用より)。



徐世荣, 『普通話語音知識』 p. 55より

図1 音素位置比較図

そこで、中国語の音素の調音点(図1)から見て、後続の音の調音点が[n]から遠いもの程先行の-nは、舌尖が歯茎につかないで発音される可能性が高いのではないかと予測した。それで、表2では後続の音が母音である場合から始めて、舌尖がついていない可能性の高い順に、[n]の中間の舌尖中音[d][t][l]、同じ[n]、最後に何も続かない場合、すなわち[n]が文末にくる場合まで並べて調査に備えた。

そして、中国語を母国語とし、北京官話を話す informant 4人に、問題の音の組み合わせを含んだ次の文を読んでもらい、舌尖が歯茎についているかどうか個々の場合について確認した。

1. 这次他发表的論文震動了歷史学界，可真說是一種翻案。
2. 你別鬧，安安穩穩地念書吧<sup>15)</sup>。
3. 这跟二表哥倩兒又有什么關係？
4. 不行，大哥又占了便宜。

15) 1と2の文は、大河内前掲論文より借用した。

5. 二姐，你来看，金魚真好看！
6. 你們都掉轉身子不許偷看。
7. 好極了，我第一个贊成！
8. 時間不早了，也應該早些去准备才是。
9. 今晚上就算我来作東。
10. 琴姐在騙我們。
11. 那是自然的事情。但是你跟他不同。

結果は次の表2のようなものであった。結果は大体予測通りに出たが，informantの間で割れているものも少なくない。たとえば，母音，[h]，卷舌音zh，ch，sh，rの前でもっと舌先が歯茎につかないことを予測したが，きちんと調音点を守る答えが予想以上にあった。sh，x，r，sは摩擦音 (fricative) で，これらが後続する場合も，stopやaffricateの音より舌先が離れたまま続くことがある程度考えられる。これについては今回十分な資料を得なかったので，今後の課題としたい。半母音のy，wが続く場合は舌先がつかないという予測が大体当たった。舌尖歯茎音の[d] [t] [l]の前で舌先がつかないという答えが割合あったのは，予想外であった。跟他や你們都の下線部が独立し得る語であるため，-n#と同じように受けとめられるためであろうか。そして，最も予想外であったのは，-n#の位置で舌先をつけない，という答えが圧倒的に多かったことであった。

以上の結果から，たとえば「翻案」を[fān? àn]のようにɿ，ʔ，ŋの渡り音を入れて発音することによって連音を避けている場合と，-nの調音点をずらす（歯茎に舌先をつけない）ことによって避けている場合の両方があることが判る。また音韻変化には多数の要素がかかわって，非常に複雑である<sup>16)</sup>ことが判った。この稿で取り上げた発音の容易化の欲求の他に，発話の速度，声調との位置関係，先行の母音の舌の位置（例，「便宜」の時にはインフォーマントの4人とも舌先がついていないのに対し，「金魚」の時には2人対

---

16) 有坂，前掲書，p. 279。

表 2 後続の音による /-n/ の調音の変化 (インフォーマントに対するインタビューの結果)

撥音の場合		撥音の場合	
-n+v	翻案○1, ×3 安安○2, ×2 穩穩×4 跟二表哥○1, ×3	[-v]	-n+w 今晚○2, ×2 算我○1, ×2 騙我×4 -n+f 該当の語彙含まず
-n+h	真好看○2, ×2	[-v]	-
-n+y	便宜×4 金魚○2, ×2	[-v]	k -n+g 該当の語彙含まず
j	琴姐○2, ×2	[n]	z [n]
-n+q	關係×3	[-v]	-n+c 該当の語彙含まず s
zh		-	d 自然的○2, ×2 震動○1 你們都×3
ch	贊成○4	-	-n+t 跟他○1, ×3
-n+sh	掉軋身子○1, ×3 但是○4	-	l 占了○3, ×1
r		-	-n+n 今年○3, ×1
p		[m]	[n]
-n+b	時間不○3, ×1 准备○3, ×1	[m]	翻案○1, ×1 好看×4 偷看×3
m	怎么○3, ×1 什么○1, ×1	[m]	-n# 我們×4 [N]

註 ○は舌先が齒莖についていること, ×はついていないことを示す。数字はインフォーマントの人数。○×で合計4に達しないのは全員から答えが得られなかったもの。



2人に割れている。「金」が jin と舌の位置の高い母音を含むので、続いて舌先を歯茎につけやすいためと考えられる)、それから意志伝達における有効迅速をはかるための重音(軽声の反対)についても考えなければならない。この最後の点について有坂は、繁忙化する社会にあって、談話の速度が増し、できるだけ簡易な手段で疎通をはかろうとするため、「一音一音の発音の正確さは犠牲にしても語そのものを一丸として直ちに把握させ」ようとする。それで語の核心となる一音節を特に強調し、これを中心に他の音節は従属することになる<sup>17)</sup>、と書いている。そこで -n をたとえば他の語と区別するためにはっきり発音しなければならない時など、重音する時にはきちんと調音され、そうでない時には、必ずしも正確に発音されないこともある、ということになる。また話し手の出身地による方言の影響も無視できない。舌先をつけない /-n/ の中にあるものは、日本語の撥音の [N] に近いのではないだろうか。この推測の理由として1つには、調音点のずれについてインフォーマントの中に舌先が歯茎につかないでうしろの方でついている、と答えた人がいたこと、もう1つに、大河内氏が「翻案」の /f a n/ の /-n/ について、「広母音に移る準備として、あるいは広母音と広母音の間にある閉鎖として、一般の /-n/ よりずっと後よりで閉鎖またはそれに近い運動が行なわれている」と観察している<sup>18)</sup>、ことがあげられる。

## 終りに

中国語の教科書に、この稿で取り上げたような細かい点が扱われないのはともかくとしても、母音が続く時の音節末の /-n/ の調音について中国の文献に十分な説明がないのは、中国語を母国語とする人にとって、連音しないのは当然だからだろうか。この環境において連音しないことは、日本で出版された書物から知った。

---

17) 同上書, p. 262.

18) 大河内, 前掲論文, p. 25.

中国語の /n/ が音節末にくるとき、英語の [n] 程厳密に調音されない<sup>19)</sup>こと、すなわち、舌先が歯茎につかないことがあることは確かである。

一般に音韻の変化を支配する原則は、1つの特定の言語に通用しても、必ずしも他の言語には適用できない。しかし、大体普遍的に適用できるものもある。日本語の撥音は本来日本語になかったもので、漢字の輸入で生じている。異なる二言語ではあるが、案外中国語の音節末の /n/ もあるものは撥音の [N] と同じか極めて近似したものなのではないだろうか。いずれにしても中国語の音節末の /n/ のもっと厳密な分析と詳細な記述が今後必要とされる。

---

19) 尾崎氏は、「南」/n a n/ が [nan] という音で現われ、前と後の /n/ は異なった音素で、[n] は口蓋化した音で声母 /n/ の発話的実現とは区別すべきものである、と書いている。尾崎、前掲論文, pp. 341~342。